

# 尊経閣文庫所蔵の『黄帝内経明堂』

## 最善古鈔本

—— 判明した巻首の欠字 ——

小 曾 戸 洋

唐・楊上善編注の『黄帝内経明堂』十三巻はすでに中国において亡佚し、わが国の仁和寺に巻一（永仁本・永徳本二種）が現存して国宝指定を受けていることは普く知られるところである。巻一（含序文）のみとはいえ、それが復元という手段を通じ、全体の旧を推知する上でいかに貴重な資料たるかについては論を俟たない。<sup>1)</sup>従来『明堂』のテキストはこの仁和寺本を基原とする転写本によるものであったが、仁和寺本の原型をありのままに伝えるものではなかった。このことから、演者らは『明堂』研究には仁和寺本二種の影印が最善の資料と考え、先年仁和寺当局の許可のもとにこれら<sup>2)</sup>を出版した。

ところが演者はごく最近、尊経閣文庫に所蔵される古卷子本を被見するに及んで、それが仁和寺本を凌駕する最善

本であることを知った。すなわち尊経閣本は仁和寺本よりもさらに書写年代が古く、しかも一字の欠損もない巻一の完璧な鈔本である。尊経閣本の検討報告はこれまで斯界においては皆無である。よってここに簡報する。

前田家尊経閣に『明堂』の古卷子本が所蔵されることは、江戸時代には知られていなかった。<sup>3)</sup>普く善本秘籍を探索した江戸医学の人々もその存在を記していない。昭和九年刊の『尊経閣文庫漢籍分類目録』に「黄帝内経明堂、第一巻、古黄帝撰、隋楊上善撰、古鈔巻」と著録されたのが公けにされた初かと思われる。昭和十五年の時点では国宝に指定されていた。石原明氏は文部省編『国宝（宝物類）目録』を引いて「黄帝内経<sup>明堂巻一</sup>太素巻十九<sup>残巻二巻</sup>、紙本墨書。明堂経の奥書に文永元年和氣種成書写校合とあり。紙背に種成宛加級消息七通を貼す」と記す。<sup>4)</sup>ただし石原氏は実見していなかったとみえる。<sup>5)</sup>次に演者の知見を示す。

『黄帝内経明堂』巻一。卷子装一軸。全九紙。界高二四cm強。界間約二・九cm。紙を継いでから書写したらしく、継ぎ目に行がわたるので正確ではないが、一紙約二〇行。每行字数（経文）は不同で一九〜二三字程度。

卷首二六行にわたって楊上善序があり、次いで本文である肺経の部に入るが、両者の筆は別人。第一〜二紙・第八〜九紙の継ぎ目、および末尾の奥書下の三箇所に「和気種成」の五角形の双辺印が押捺。全般にわたり傍注・傍訓・返り点・朱のヲト点を存す。末尾には次のような奥書がある。

文永元年七月廿三日於仙洞房曹以累葉

当家之証本書写訖

正四位下行兵庫頭兼安芸介和気朝臣〔花押〕

一校了種成同九月九日戌終刻於芝御移点了種成

さらに最終行近くに離れて次のようにある。

弘安五年七月八日一見了〔花押〕

文永元年は一二六四年、弘安五年は一二八二年にあたる。

すなわち仁和寺所蔵の永仁本より三〇年余りを溯る鎌倉中期の写本である。

和気種成はいうまでもなく和気広世を始祖とする典医の直系で、半井家の祖である。和気氏系図によれば、「種成、侍医正四位下、兵庫頭、昇殿、典藥権助、母——、出家法名仏種、正応元年九月三十日卒、六十八才」とあるから、

この『明堂』（書体からみて序文を除く全文）を書写したのは四十四歳の時である。また六十二歳のときに一読してその旨跋したことが知れる。種成は梶原性全の師であったと推測する説もある<sup>(6)</sup>。本書はいわゆる『真本千金方』<sup>(7)</sup>などとともに、和気氏の家学を探る上での一つの資料ともなる。最後に、本資料によって初めて判読可能となった巻首序文の數行を提示しておく。

臣聞星漢照廻五潢分其瀾澳荆巫涪水九派洩其淪波亦所

以発神明之靈化通乾坤之氣象（臣聞く、星漢は五潢を照

廻して其の瀾澳を分かち、荆巫の涪水は九派して其の淪波を

洩らす、と。亦た神明の靈化を発して乾坤の氣象を通ずる所

以なり。）

尊経閣文庫の『明堂』は現存三種の古鈔本中、最善本と認むべきものと結論する。

〔文献および注〕

- (1) 小曾戸丈夫『黄帝内経明堂』仁和寺本復元試案例、『矢数道明先生喜寿記念文集』温知会（一九八四）。
- (2) 『東洋医学善本叢書』第三冊所収、東洋医学研究会（一九八一）。
- (3) たとえば岡西為人『宋以前医籍考』所引の文献にも未載。

- (4) 「国宝医書目録」、『日本医史学雑誌』、一三三四号（一九三  
四）。
- (5) 石原明「明堂經について」、『漢方』一卷四号（一九五二）に  
より明らかである。
- (6) 石原明「梶原性全の生涯とその著書（一）」、『日本医史学雜  
誌』、六卷四号（一九五六）。
- (7) 室町写本。卷一。宮内庁書陵部所蔵。  
（北里研究所附屬東洋医学総合研究所・医史学研究室）

ジョン・スノーとその麻酔科学  
の業績——とくにその著書 “On  
the inhalation of the vapour of  
ether in surgical operations” につ  
いて

松木明知

1

昨年の本総会で、演者は世界で最初の麻酔科学の単行本  
とその著者であるジェイムズ・ロビンソンについて報告し  
たが、今回は、その著書に遅れること数ヶ月して発行され  
たジョン・スノーの「On the inhalation of the vapour of  
ether in surgical operations」について報告する。

2

一九八〇年九月ハンブルクで開催された第七回世界麻酔  
学会において、「麻酔科学の過去と未来」というシンポジ  
ウムが開催されたが、その席上オックスフォード大学の初